

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	武上 真理子
論文題目	孫文の科学思想——「科学の時代」における哲学構築の歩み——		
(論文内容の要旨)			
<p>本学位申請論文は、近代中国の革命家・政治家として著名な孫文(1866-1925年)の思想を、19世紀から20世紀にかけての「科学の時代」における思想的営為と見なし、欧米・日本・中国の近代科学思想の潮流の中に孫文の思想を位置づけ、彼の思想が「科学」から「哲学」へと深化したことを論証しようとするものである。</p> <p>序章では、まず「科学の時代」における孫文の思想を世界史的観点から俯瞰する試みがなされている。すなわち、19世紀の「第二次科学革命」によって科学が宗教から自立し、自然科学を指す「狭義の科学」と人文・社会科学の諸領域の学問を含めた「広義の科学」も確立し、普遍的な真理を体現するものとして社会的権威を獲得していったこと、同時に、科学の大衆化の動きが顕著となり、専門家の「知」のエッセンスをもとめる人々に伝えるポピュラー・サイエンスが興隆したことが指摘される。その上で、孫文が自ら「真の知識」と語った「科学」へのアクセスを保障した回路とは、この19世紀から20世紀半ばにかけてさかんに出版されたポピュラー・サイエンスに分類される書物であり、上海に残されている孫文の蔵書(政治・経済・社会関係の書籍が約半数を占め、ついで医学・科学技術・哲学の書物が多い)は、彼の「広義の科学」への関心を示すものである、とする。</p> <p>つづく第1章では、孫文の科学をめぐる思想的道程の原点と到達点とが示されている。原点とは、彼が青年期香港西医書院で受けた英語による医学教育であり、内科・外科・産科の医療免許を得た彼は、サイエンスの実践者としての自覚を有していたことである。そして到達点とは、アメリカ人クェブリの著作『細胞の知性』に依拠して展開された、『孫文学説』の「生元」説である。本章によれば、それは、「生元」(細胞)の働きが分化する過程として生物の進化を説いた上で、この「生元」の役割を人間の多様な生が発揮されることを可能にしていると論じる「生の哲学」を構築しようとした試みなのである。</p> <p>以下、第2章から第4章では、孫文の科学との関わりが彼の個別の著作にもとづいて検討されている。</p> <p>すなわち、第2章では、孫文が1897年、亡命先のロンドンで英語から中国語に翻訳した救急治療法マニュアル『紅十字会救傷第一法』が取りあげられている。それは、西洋医学の東アジアへの伝播、赤十字を中心とする戦地医療活動の国際的な普及を示すとともに、近代中国が受けとめた実用科学としての医学の姿を表しており、まさしくポピュラー・サイエンスの一形態である、と位置づけられる。</p>			

また第3章では、1919年に孫文が英語で発表した、中国経済発展の一大プロジェクト提言書として知られる『実業計画』の背景や当時の評価を検討し、英語圏・中国においても、応用科学（とくに土木工学）関係者からの関心を引いたこの書物を、「工学」の書として捉え直すことを提起する。

そして第4章では、この「工学」の範囲を、経済開発の重要要素たる交通の起点として港湾開発にしぼり、『実業計画』の「第二計画」中の、杭州湾築港計画・上海東方大港計画を考察の対象としている。同章は、この誇大にすぎると称されることもある同計画を、上海租界当局（浚浦局）の上海築港プランや、政治家・実業家として知られる張謇の水利事業と比較した上で、孫文は当時のエンジニアたちの報告書などさまざまな情報を参照しており、それがプリコラージュであるとしても、工学技術の社会への適用と評価できるものだとしている。

終章では、これらの孫文の科学思想についての議論を総括した上で、「科学の時代」における彼の「哲学」の問題に立ち帰り、議論が展開されている。本章によれば、孫文が西洋文明から吸収した「科学」は彼の思想的営為の糧となり、彼独自の「生の哲学」を結晶化させた。それは「生元」の微細なレベルから一人ひとりの人間の生命を把握し、さらに国民を「生元」として構成される有機的集合体（国家）も、生命を有する存在として位置づけたものであったのである。学位申請者は、最後に、孫文の「生の哲学」を継承し、彼の見据えた生命の活動を、地球という環境全体で捉え直すことが、現代に生きるわれわれの課題である、と論じている。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、孫文の思想を、彼が生きた時代の文化的社会的側面から再検討するための鍵概念として「科学」に注目し、「科学の時代」というべき19世紀から20世紀にあって、ポピュラー・サイエンスを体現した思想家として孫文を再把握することを目指したものである。

従来の研究では、孫文への「偉大な革命家」との評価や、彼が何よりも政治的指導者であった事実が前提とされ、彼の言説や著作に表れた思想は、「科学」や「哲学」に関するものであっても、すべて革命の実現に寄与するためものとしての評価を受けてきた。しかも、一方で、彼の「科学」思想は、その後の中国の経済発展の方向性を示していたといった過大評価、乃至は今日的な政治的要請による解釈が行われてきたのである。

こうした研究状況に対し、本論文は、こうした前提や固定的視座の制約を離れ、孫文が生きた時代状況に即して、彼の著作・翻訳書である『孫文学説』『紅十字会救傷第一法』『実業計画』に焦点を当て、従来の研究が無視しがちであった英語文献に注目しながら、その成り立ちと公表の過程を論じ、医学書・工学書としての意義を詳細なまでに実証、孫文に「ポピュラー・サイエンスの時代の子」との評価を与えている。こうした孫文の科学思想の考察は、これまで全くなされてこなかったものである。孫文の思想研究に新たな地平を切り拓いたものだと言えるこの点が、本論文の第一の学問的貢献である。

また、従来の研究では、孫文の「哲学」が語られる場合、彼の政治勢力を継承した国民党右派の理論家たちによって、孫晩年の「民族主義講演」で称揚された儒教の伝統的価値観の存在が強調されてきた。しかしながら、本論文によって孫文は「科学」の探求を通じて独自の「哲学」を構築したことが論証され、同時に、彼の「民族主義講演」の儒教宣揚は、第一次国共合作推進のための保守派を説得する手段として提起されたものであることも、明らかとなった。この中国近現代史の政治史研究でこれまで「難問」とされてきた問題に、解決を与えたことが、本論文の第二の学問的貢献である。

さらに、19世紀から20世紀にかけての「科学の時代」に、「科学」と「哲学」の相互関係をどのように位置づけるかは、孫文ら中国の知識人のみならず、日本の知識人の課題でもあった。本論文は、“philosophy”を「哲学」と訳した西周にあっては、“science”とは学術全般の意味であったのに対し、明治中期以降、この二つの後が今日で使われるようになって以後、両者をいかに対置し、関連づけるかが問題となったのである。本論文は、そこで1883年に公表された長澤市蔵の論文が「科学哲学の相関する所」を論じていること、1910年の『哲学大辞書』が哲学を「根本科学」と「総合科学」の調和したものとして定義したことを見出し、中国の知識人である孫文と、明治期日本の知識人が、「科学」と「哲学」をめぐって同じ課題を共有していたことを

明らかにした。日中近代思想史の比較研究において、従来全く言及されることがなかった論点を指摘したことが、本論文の第三の学問的貢献である

もちろん、本論文が、孫文の捉えた「科学」が政治学や社会学、経済学などの社会科学、さらには人文科学を含めたものであったとしながら、具体的に検討しているのは、「医学」と「工学」に限られていることは、研究対象が限定されすぎていると判断することもできよう。しかしながら、19世紀にはじまる「ウェスタン・インパクト」を、西洋諸国の中国に対する政治的経済的侵略だけに限って評価することに限定しなければ、それが西洋文明が東アジアにもたらした「科学」の最初の重要な分野こそ、「医学」と「工学」であったことは、明治日本における帝国大学の設立状況からも明らかである。この意味で、東アジア近代比較文明史にとって、本論文は新鮮な問題提起をなしたものであり、第四の学問的貢献であると評価できる。

以上を総合して、本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文としての価値を有するものと認める。また、平成24年2月3日論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降